

コロナ禍での一対一交流(2022.1月記)

横浜国大部会 八木 勝司((商船三井OB)



ヴィライヴォンさんと筆者

しく思い出されます。

コロナ禍により私たちの活動は大幅に縮小することとなりました。一対一による対面での交流は困難となりました。今や大学側による外国からの新入留学生の受け入れもほぼ止まっています。

そんなコロナ禍で私は5名(エチオピア、ガーナ、スリランカ、バングラデシュ、ラオス)の学生と交流を行ってきました。

彼らのほとんどが世界銀行の奨学金を受けた政府関係機関等で働く職員で、修士課程で学んでいます。最近では家族帯同が増え家族のケアも必要となり、いろいろな相談を受けました。

コロナ感染が始まり対面交流が難しくなりつつあった2020年3月、4月にかけて留学生より、「安くて広い住居に替えたい」、「幼児を保育園に通わせたい」といった相談があり、関係先に同行して通訳兼交渉に当たりましたが、一回ですんなり済むことはなく、マスク等感染対策をして数回同行をしたものです。今振り返ると対面交流がぎりぎりの中、彼らと歩き回った頃が懐かしく思い出されます。

それ以降の対面交流は困難となり、メール等での交信に代わり、コロナ禍以前のような対応ができなくなりました。そうした中、スリランカの学生が本国に一時帰国しましたが、感染拡大で半年近くも出国ができず、修了式一か月前に何とか日本に戻ることができ喜びを分かち合ったものです。

今は彼らも修士課程を修了し、それぞれ本国に戻り、時折メールでの連絡を受け、元気であることで安堵しています。

コロナ禍以前では当部会の交流留学生は83名の登録がありましたが、今や受け入れがストップし激減しています。

私も今はラオスの女子学生のヴィライヴォンさんのみとなりました。彼女も今年の9月に博士課程を修了し、5年の日本での生活を終え本国に戻ってしまいます。それまでに早くコロナ禍が収束して、また普段通りの対面での交流に戻れればと願っています。

以上